

産前産後の病気の予防を考える

乳牛の病気は圧倒的に産前産後の時期に多く集中しています。その理由は乾乳から分娩、分娩から泌乳に向けての大きな代謝活動の変化にあります。その変化をスムーズに流れるようにしなくては病気の予防はできません。代謝活動のどのような部分が大きく変化をするかを知り、その予防対策を考えたいと思います。

①産前産後に病気が多い理由

産前産後に乳牛の病気が多い理由は以下になります。

- 1) 分娩近くになり、胎児が大きくなることによるDMIの低下。個体間のばらつきは多い。
- 2) DMIが低下するにも関わらず、栄養要求量は増大し更に栄養不足を招く。
- 3) 胎児の栄養要求量が意外と多く、しかもアミノ酸で要求される。
胎児の糖分は母胎のアミノ酸より作られる。従って母胎のアミノ酸は枯渇しやすい。
- 4) 胎児は乾乳期に急速に成長する。
- 5) 分娩近くになるとDMI低下しルーメン機能が低下するために、ルーメンで生成されるアミノ酸は減少する。
- 6) 劣悪な環境で飼われていることがおおい。
- 7) 栄養に気を使われていない。

この中で大きな比重を占めるのが、アミノ酸と乾乳牛の飼育環境です。乾乳牛は稼がない牛とのことで、品質の悪い乾草を給与したり、残飼を給与したりすることが現場では見られます。栄養的に粗末な扱いを受けていることが多いのですが、本当は農場の中で一番重要な牛が乾乳牛と考えなくてはなりません。乾乳牛は明日の収入を稼いでくれる重要な牛たちです。その牛たちの栄養と飼育環境を整えてやらねば、病気になります。特に多くの乾乳牛を抱える大規模農家では、乾乳牛の管理を失敗すると病気の嵐となってしまいます。頭数が少なければ、1頭の治療で済んだものが、頭数が多ければ分娩する牛皆病気になってしまいます。精神的にも肉体的にも苦痛となる事態を招きます。

②乾乳牛の栄養の問題とその特徴

乾乳牛の栄養管理は、農場で一番重要な栄養管理です。この時の管理の良否が乳量を決め、病気の発生を決め、その後の経営内容を決めます。

乾乳牛の栄養のポイントは、外見的には太らせない、痩せさせない、満腹感を与えるです。BCSの調整は泌乳末期に行い、決して乾乳中に行ってはいけません。短い期間でのダイエットは、その後の栄養的問題を引き起こすきっかけとなってしまいます。もう一つのポイントは蛋白質です。誤解を招くといけませんので、代謝蛋白質と言葉を限定します。代謝蛋白質とは、ルーメンで合成された菌体（微生物）蛋白質と、ルーメンをエスケープしたバイパス蛋白質の合計をいいます。これを十分に給与することがポイントになります。

1) 太らせない、痩せさせない、満腹感を与える

言葉では簡単ですが、現実的には難しいことです。かなり痩せている牛は乾乳中に太らせることが必要ですが、通常は太らせることは禁忌です。太った牛は痩せた牛よりも分娩前に乾物摂取量が低下しやすくなり、栄養不足となります。その結果体に蓄えた脂肪をエネルギーに変えようとして、肝臓に大量の脂肪が動員されます。これにより脂肪肝が発生します。脂肪肝は外見的に